

前回指摘事項及び検討対象水域（利根川水系、荒川水系）に関する補足情報説明

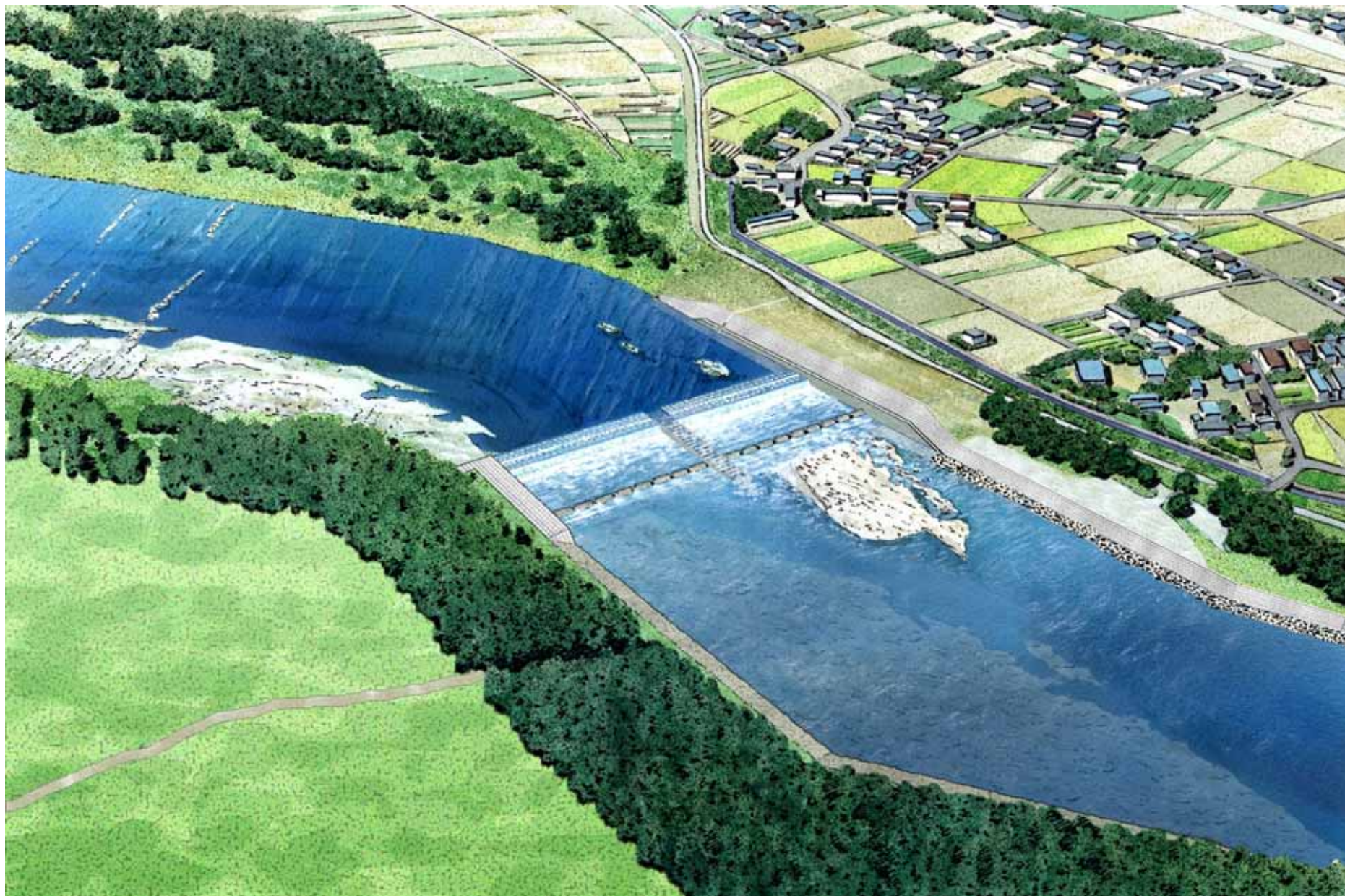
	指摘事項等 調査結果状況
1	<p>ウグイの産卵床は、毎年同じ場所に作られているのか、知見を収集すべき（場所が次々変わるのなら対象にできないが、固定されているのであれば検討が必要）。渡良瀬川、荒川で造成されているウグイの人工産卵床はほぼ同じ場所又は同じ場所に設置されている。それ以外は設置場所を定めていない。（「別紙 1 人工産卵床の設置状況」参照。）</p>
2	<p>（神水湖から渡戸橋までで冷水性の魚種が見られることに関して）現場の人に確認すること。</p> <p>ダムの深層水放流で冷水が流れているのか。</p> <p>この付近でたくさんの冷水性の魚が放流されているのか。</p> <p>及び について、下久保ダム管理者からの情報によると、設備面では選択取水が可能で、表面取水・放流を実施。また、埼玉県水産部局担当者からの情報によると、魚の放流は、地元の漁協がアユ及びヘラブナの稚魚を放流している実績はあるが、冷水性の魚は放流していない。（下久保ダム管理者及び埼玉県水産部局担当者へのヒアリングより）。</p>
3	<p>神流川が合流する先の利根川は(A)であり、神流川下流で(B)にするのは問題ないか、水温や魚の生息状況からみて、(A)に(B)が入ることの整合性について、現場をよく知る人に確認すること。</p> <p>神流川下久保ダム～烏川合流点までの魚類情報について、近年調査が実施されていない。なお、以前にはカジカが全域に生息していた情報がある。（関東短期大学関根氏へのヒアリング、及び過去の文献を取りまとめた資料「群馬県河川水辺国勢調査報告書 H14.5」にも記述）。なお、類型指定の整合性については、については、「資料 4 検討対象水域の類型指定（案）」を参照。</p>
4	<p>明戸サイフォンの魚道工事の実施状況を調査しておくこと。</p> <p>魚道整備事業については、今年度より工事着手予定（国交省関東地方整備局担当者へのヒアリング）。別紙 2 「明戸地区河道対策整備完成イメージ等」参照。</p>
5	<p>武蔵水路からの流入状況</p> <p>武蔵水路から荒川への流入水量の割合は、利根川由来が 7 割、荒川由来が 3 割となっている（別紙 3 「武蔵水路流入状況」参照：水資源機構武蔵水路改築調査所 HP）。なお、類型指定の整合性については、については、「資料 4 検討対象水域の類型指定（案）」を参照。</p>
6	<p>中川・綾瀬川塩分遡上の状況</p> <p>別紙 4 「塩水遡上区間」参照（出典：平成 17 年度河川空間利用計画検討業務）。</p>
7	<p>霞ヶ浦・北浦の亜鉛の検出状況</p> <p>別紙 5 「霞ヶ浦・北浦の亜鉛検出状況」参照。</p>

人工産卵床の設置状況

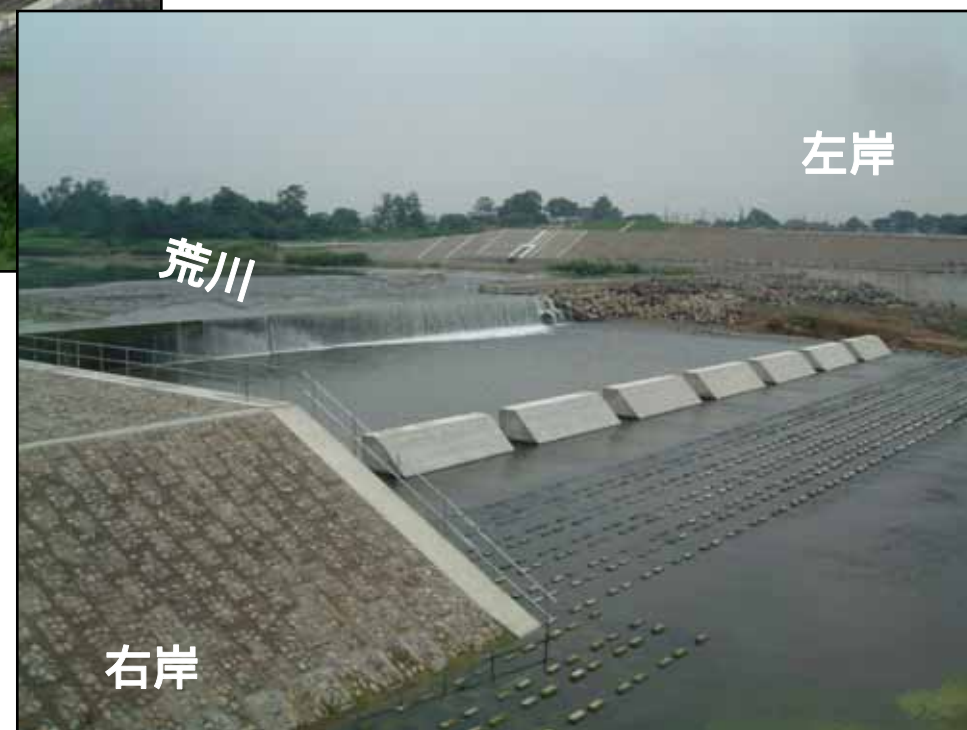
河川	管轄漁業	平成17年度調査(ヒアリング)結果	平成18年度調査(ヒアリング)結果	人工産卵床造成場所	産卵等の実態に関する調査	保護水面の有無
利根川	利根漁業	ウグイの人工産卵床を毎年(5 - 6月)作っている(4支部)	河川の状況を勘案して場所は決めている。細かく見れば毎年異なる場所を実施している。	毎年異なる場所	実績なし	×
渡良瀬川	両毛漁協	人工産卵床については相川橋・市民広場前・錦桜橋下流・昭和橋下流で毎年4月～5月にウグイ産卵床を造成している。	毎年、ほぼ同じ場所で人工産卵床を整備している。	ほぼ同じ場所	実績なし	×
神流川	神流川漁協	毎年5箇所程度ウグイ・オイカワの人工産卵床を造成している。場所は特定していない。	河川・魚の生息状況を見て毎年場所は変更している。平成19年度からはウグイ産卵床1箇所、オイカワ産卵床1箇所合計2箇所に減らすことになった。	毎年異なる場所	実績なし	×
綾瀬川	埼玉東部漁協	綾瀬川佐藤橋下流の中洲に人工産卵床を作っており、その中洲にはヨシノボリ・クチボソ等が多くの魚が生息している。	河川・魚の状況を勘案して定期的に場所は変更している。現在、人工産卵床は佐藤橋下流(中洲)に無く、支流に整備している。	定期的に異なる場所	実績なし	×
荒川	秩父漁協	毎年4月中旬～5月末まで、管轄域内で本流に10箇所程度ウグイの人工産卵(まや)を造成し、一部はそのまま産卵場所として期間中保全し、一部では卵を採取・人工孵化させて稚魚放流している。	毎年、ほぼ同じ場所(10箇所)で人工産卵床を整備している。	ほぼ同じ場所	実績なし	×
荒川	埼玉中央漁協		毎年、同じ場所で人工産卵床を整備、19年度は4月中旬～5月上旬(H19.7月ヒアリング)	毎年同じ場所	毎年実施	

明戸地区河道対策整備完成イメージ

別紙2



明戸地区河道对策整備現況写真



(5) 塩水遡上区間について

水理特性からみると、

イ. 対象区間は中川・綾瀬川ともほぼ全体から感潮区間に位置する。

ロ. 下流部は塩水が遡上しており汽水域が形成されている

ことから、淡水区間と塩水遡上区間の2つに区分することができる。

近年の最大塩分濃度(平成12年～平成16年の5ヵ年)を縦断的にみると、図2.1.2のようになる。一般に、淡水の塩素イオン濃度が100mg/l程度以下といわれていることから、塩水の遡上範囲は概ね以下のように考えられる。

表 2.2.2 塩分遡上区間

河川名	塩分遡上端
中 川	三郷放水路(21.5k)付近
綾瀬川	手代橋(13k)付近

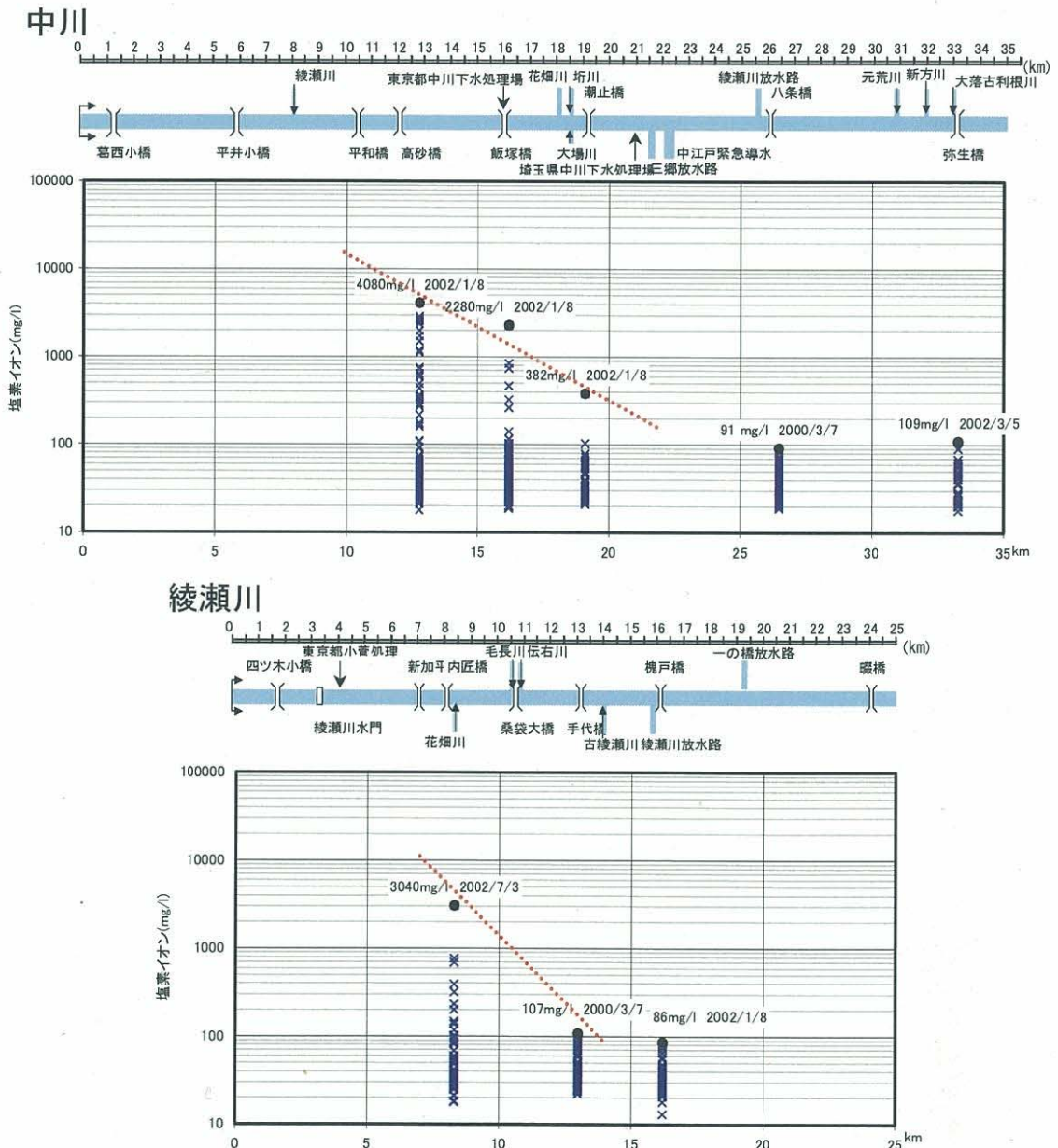
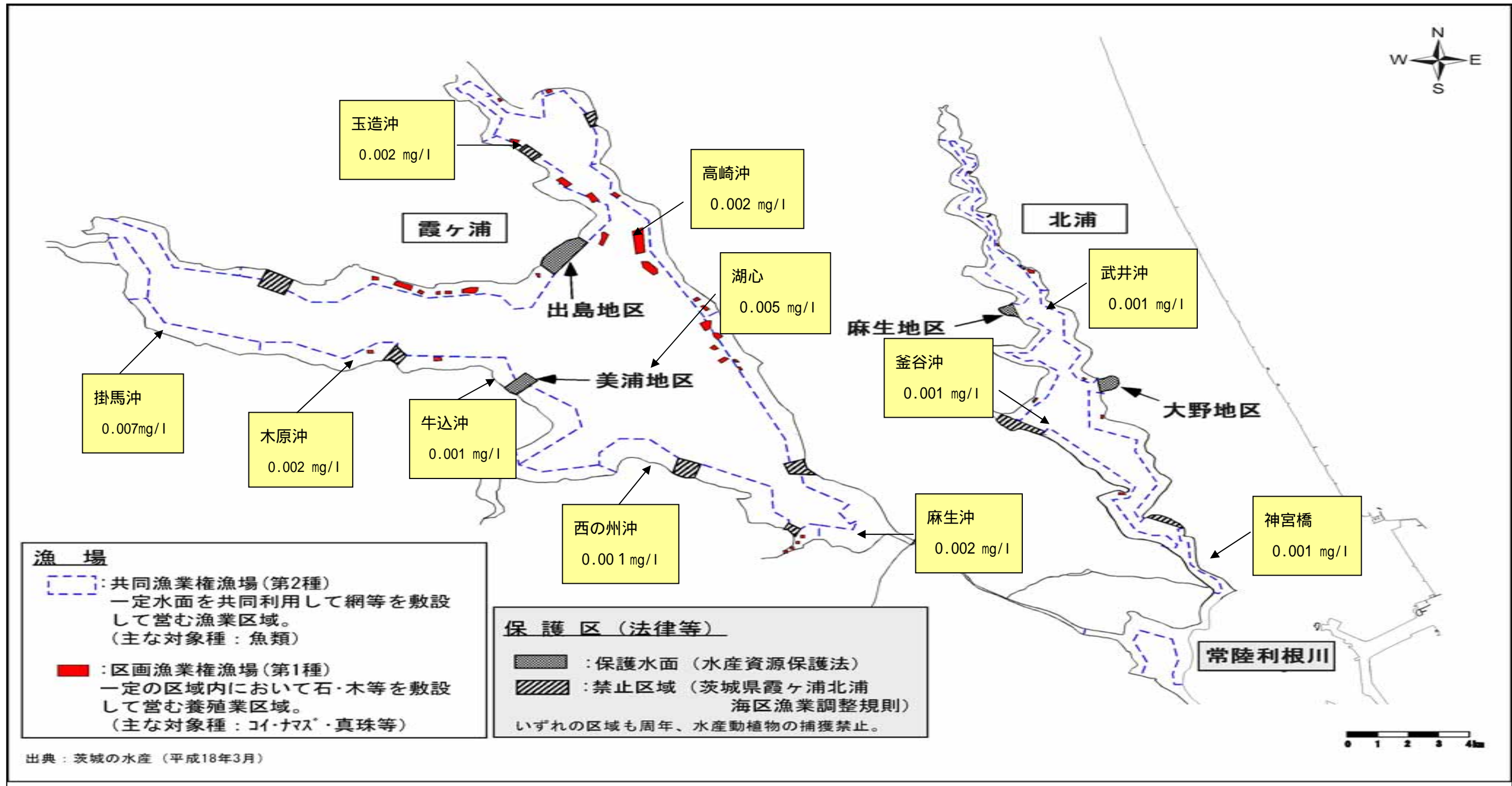


図 2.2.3 塩素イオン濃度縦断図(H12~H16の5ヶ年最大)

【霞ヶ浦・北浦の亜鉛検出状況】



地点：環境基準点()
 補助点()
 H18年度の公共用水域水質測定計画より(年平均値)